

又長彈爭而極其秘矣。歲十九嫁我大人。生四男一女。其爲人方正誠實。於孝敬貞慈。其道無一弗達。比古賢夫人而無愧。又信法華而慈悲之意深。故爲孤寡貧寒之人。損衣實而賑救其急苦者。前後不可舉數矣。此他行狀可紀者。萬々何盡云々。先妣以享保六年七月二十五日生。以寛政二年十月十六日卒。享年七十。卒日。世知與不知。皆無不惜矣。嗚呼哀矣哉。寛政四年十月十六日孝子富田景周泣血書。とあり。或人曰く、富田痴龍翁の學事に勉強して百事に精魂を盡し、三州志以下數十部の著書を撰定す。是皆實母與村氏の女性ながら幼少より詩歌を作り、書籍を好み、著述の書癖あるにより、母の氣風をうけたるものなりと、彼の家人いへりとぞ。按するに、燕臺風雅に、景周兄弟些有文辭者、全母氏庭訓之力也。とあるにても知られけり。景周兄弟とは、實弟富田彦左衛門が事也。此の人も學事ありといへども、不幸にして天明六年罪科に處せられ、翌年五ヶ山へ配せられたり。

○前田備前舊事

延寶金澤圖を考ふるに、富田治部左衛門第の向なる邸地を

前田備前と記載し、前口四十六間二尺とありて、後。地は御貸家と載せたり。其の隣地は前田對馬とあり。前田家略譜に、高德公六男利貞、初名利豐、幼名御世松又乙松丸、長而稱七兵衛。又改稱備前。慶長三年三月十六日生。于山城伏見。同五年五月使神谷信濃守近孝撫育之。因稱神谷氏。同十六年十一月賜五百石。改稱前田氏。同十九年十月於江州大津賜五千石。元和六年八月二日卒。廿三歳。生母名阿千代。越前葛野坊圓福寺女也。とあり。壬子集錄に載せたる横山外記覺書に、前田當備前祖父備前殿は、高德院様六十二の二つ子のよし、御國にて申習し候と見え、横山志摩覺書に、備前殿御袋はおいと申、芳春院様召仕のもの、由とあり。さて青地禮幹の本藩略譜に、利貞子利重、幼名又勝、長稱出雲。娶長氏連頼女。明曆三年七月廿九日卒。其子貞親自稱備前。娶長氏左兵衛元連女。寶永二年十月十三日死。と載せたり。右延寶金澤圖に載せたる前田備前は、二代備前也。

○前田出雲利重傳話

武家耳底記に云ふ。加州黃門公小松へ被爲入、前田出雲は金澤の大老を勤めけり。御仕置の事共小松へ訴へければ、

外の御用多く不被仰出。爰に先年ならかしの御銀とて、諸士不勝手者拜借し、知行の内を除知して濟しけるに、借銀皆濟すれど如何の間違ひにや除知不歸、諸士難儀しけるが、いかなる者のなしけん。

ならかしの木末の秋は過ぎぬれど

まだかりがねの音ぞ聞えぬ

など、狂歌をよみもてはやしければ、出雲聞て、かやうの外聞いかゞなり、最早御參勤も近ければ、小松へ參り是非に願はんとて、數ヶ條を書き上て小松へ參り、御前へ出で、右の書附を指上ければ、御覽被成、せがれめがと御意にて、書付をば御投被成。出雲何共不申上。風と立て御次へ出、人々に何の挨拶もなく直に金澤へ歸り、所存有之由にて妻を長如庵方へ返し、本多房州へ斷りけるは、我諸士の爲を思ひ、小松に至り、御仕置の延々成る事を奉願ける處、かやうの被成方也。我若輩なりといへども、今家老の列に有つて輕からず。然るをせがれめなどとの御意は、思召有ての事と存す。下屋敷へ引籠申也。左候はゞ定而檢使被仰付切腹可仕と存候由申、子息又勝^{後勝}を引連、

下屋敷へ引入、家來中何も暇を遣す間、今日中に家を明け可立退旨申渡し、皆散々に成けれ共、御一門の事なれば此分には成し難しと、何も彼方此方にたよりて、主人の先途を待けると也。出雲は家老の者其外近習繼に七・八人にて下屋敷へ引籠る。其内黃門公は參勤し給ひけるが、江戸にて被仰出けるは、出雲殊の外立腹の躰也。淡路飛驒にあつかひ候へとの御意也。淡路様は江戸に居給ひ、出雲方へ書狀指越さる。飛驒様は御在所より御出、松任まで御越、御使を以出雲へ被仰越。今般引籠被申仕形尤千萬也、黃門公も今は殊の外御難儀に思召、我等兩人に扱候へと御意也。存直して被出候へ。御留守中御城下へ御越の儀は遠慮被成、不被罷出候はゞ、今幾日に而も此所に御滞留被成よし被仰越。出雲返答に、誠に難有次第也。別の所存を以て引籠候に而も無御座、諸士の爲めを存じ訴へける處、御食着無之候へば、諸士の上に有て其任に不叶、上の思召も其通なれば有て甲斐なし。所詮檢使を引請切腹と存じ候也。今般の願一々被仰出、諸士の爲めに能成候はゞ、御出被下に不及罷出可申候。若又我等を御たらし、罷出候様に被遊、願